

# 幼児教育の現場における現状と課題についての仮説的検証

—保育者の自己評価の分析結果から—

竹 石 聖 子

## 1. はじめに

現在、幼児教育の現場は大きな過渡期を迎えている。幼稚園では教育基本法及び学校教育法の改正に伴い、幼児教育の重要性が強調され、特に幼児期は「生涯を通じた基礎を培う時代」と幼児期以降の連続性を視野にいれた位置づけが明確にされるようになった。また幼稚園教育要領では、幼稚園は地域の幼児教育のセンターとしての役割を担うことが明文化され、子育て支援を含めた地域との連携も求められるようになってきている。一方、保育所では、これまでの養護と教育の一体化の教育の部分がより強調されるようになり、特に教育内容については幼稚園教育要領に準ずるものとされ、幼稚園でも保育所でも、健康・言葉・人間関係・表現・環境の5領域から保育を組み立てることが基本となっている。

認定こども園の設立に象徴されるように、いまや幼稚園と保育所の垣根が曖昧になりつつあり、保育行政は幼保一元化にむけて改革が進んでいるのが現状である。

こうしたなかで、幼稚園教諭及び保育士に求められる役割や専門性も求められることが増え、かつ両者の専門性に明確な違いがあるというよりは共通したことが多くなっていくことが予想される。

またいまやほとんどの就学前の子どもたちが幼稚園及び保育園に通っており、預かり保育や延長保育の長時間化により、園で過ごす時間が増えていくなかで、保育者の役割や保育者が作り出す保育行為及び保育空間が子どもの育ちに与える影響が増えていることも考えられる。

これらを踏まえて、本論文では、現職の幼稚園教諭への予備的なアンケート調査を通して、現職の保育者が自らの保育をどのように評価し、どこに課題を感じているかを明らかにし、現在の保育現場が抱えている課題や保育者養成の課題、及び現職教育の課題について、仮説的な検証を行うことを目的とする。

## 2. 調査概要

### (1) 調査対象

本調査は、平成22年度8月に本学で行われた教員免許状更新講習に参加した97名におこなったアンケート調査である。本学の講習は幼稚園教諭免許状取得者対象のため、ほとんどが現職の教員であるが、数名、幼稚園ではない職場に勤めているものも含まれていた。

年齢は30代40代50代で、全員が女性である。またほとんどが短大卒業者であるが、四年生大学卒業、専門学校卒業のものも若干名含まれている。

表1 年 齢

	度数	パーセント
有効 30代	38	39.2
40代	37	38.1
50代	22	22.7
合計	97	100.0

表2 最終学歴

	度数	パーセント
有効 専門卒	4	4.1
短大卒	81	83.5
四大卒	11	11.3
合計	96	99.0
欠損値 システム欠損値	1	1.0
合計	97	100.0

## (2) 調査方法

講義の始まる前に、日常の保育を振り返ってほしいこと、また研究に使用することを話した上で、その場で記述してもらい、その場で回収した。そのため回収率は100%となっている。

## (3) 調査概要

アンケートの項目は全部で44項目あり、そのすべては「そう思う」「まあまあそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の四段階で回答してもらった。質問内容については『保育者が変われば保育が変わる』（諏訪きぬ）、『保育の質と子どもの発達』（日本子ども学会編）で使用されていたものを使用している。前者については、「保育者同士でいきいきと保育をしているか」「保育者間で子どもの様子を語りあっているか」など保育者同士の関係性の良好さを訪ねる項目群、「一人一人丁寧に保育をしているか」「明るく子どもによく話しかけたり、働きかけているか」など子どもとの接し方についての項目群、「子どもはのびのび生活しているか」「じっくりと遊んでいるか」など子どもの姿を訪ねる項目群、「親に気軽に話しかけているか」「親との意思疎通をしているか」など親とのかかわりについての項目群、「保育環境が清潔か」「遊具をわかりやすく配置しているか」など環境構成について尋ねる群、そして「見守る保育をしているか」「指示的命理的な保育か」「子ども同士の関係を大切にしているか」など、保育の仕方や保育観に関わる項目群で構成されている。後者は「子どもを抱いたり、背中をポンとたたいたり、手をつないだりしていますか」「子どものやりとりをしているときは、否定的な態度をとったり否定的なやりとりにならないように、前向きで積極的な態度を保とうと努力していますか」など、具体的な項目にたいして肯定的か否定的かを尋ねる項目群となっている。

もともと後者の質問群はアメリカの幼児教育施設を親が選択する際にその施設を選ぶための手助けとなるように、観察してくるポイントをチェックする項目であり、前者は日本の保育園で保育者集団の意識の共有の程度を確認するために作られた項目であるため、目的も対象者も異なる質問群を一緒にし、今回は日本の現職の幼稚園教諭に対して行った。そのため、今回はあくまでも予備的な調査であり、今回の分析を通して、質問紙を新たに作成し、調査を再度行う必要があると考えている。

### 3. 分析結果

#### (1) 具体的な関わりに対する自己評価

具体的な子どもとのかかわりについての自己評価についてはおおむね良好な結果がでている。

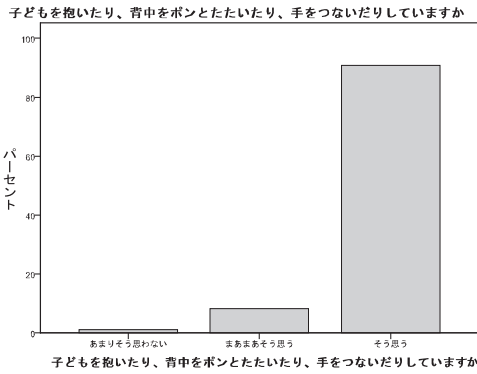


図 1

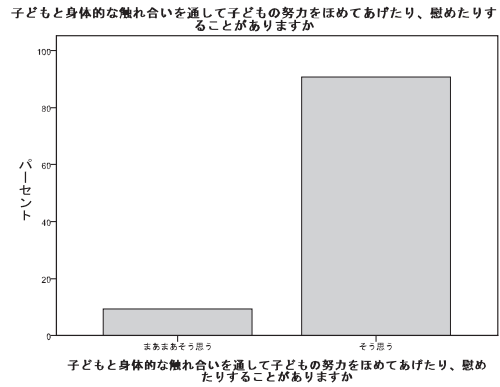


図 2

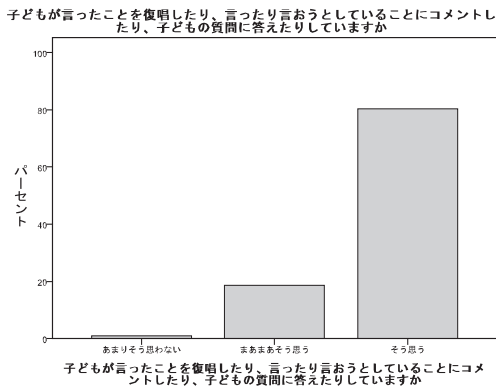


図 3

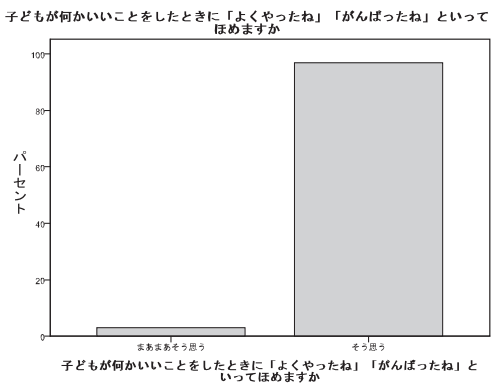


図 4

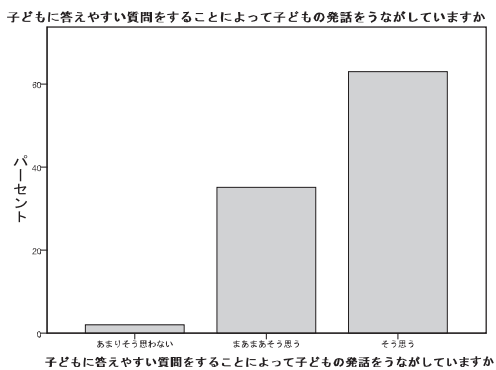


図 5

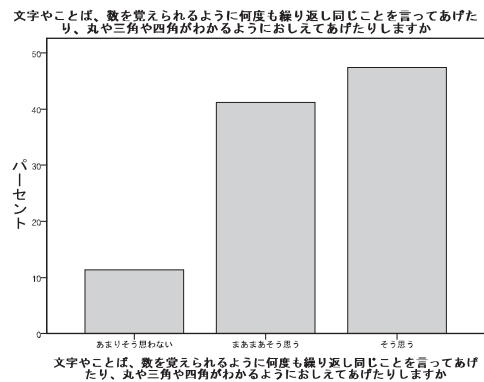


図 6

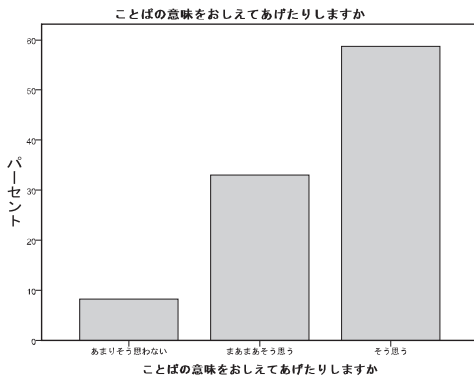


図 7

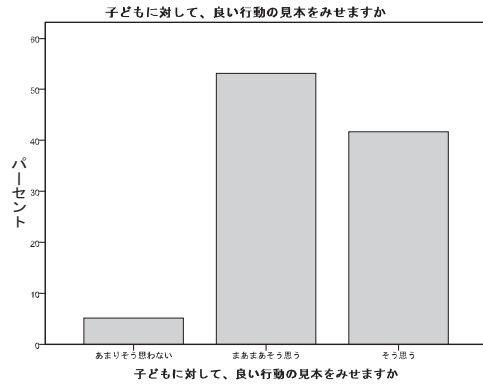


図 8

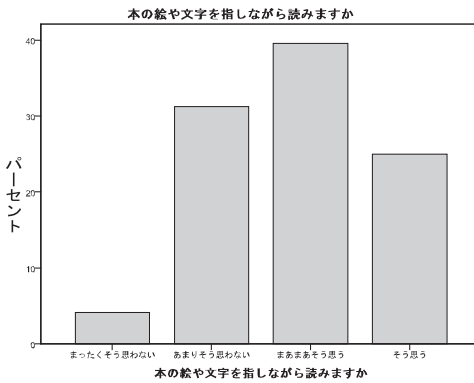


図 9

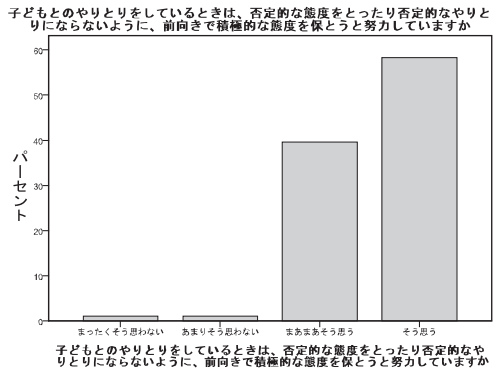


図10

図1～4は「そう思う」を占める割合が8割を超えており、子どもとかかわる際のスキンシップや「頑張ったね」という子どもを肯定する声かけなどについての保育者の自己評価は非常に高いことが分かる。

しかし、図6, 7, 9などからは、文字やことばを教えることについては「そう思う」の割合が6割程度に落ちている。このことから、日本の幼稚園では一人一人と丁寧に関わることについての保育者の自己評価は高く意識も強いのにに対して、文字を教えるといった教育内容については、おおむね良好ではあるものの、意識にばらつきがある可能性を垣間見ることができる。

図9の「本の絵や文字を指しながら読みますか」という質問に対する答えにはばらつきがみられた。これはももとの質問内容が乳児向けだったこともあり、絵本の絵を指すということに対して、それは良くないことであるという保育者の判断や年齢によるという判断からばらつきがみられることが予想される。もうひとつの可能性とは、そもそも絵本の読み聞かせの目的や価値観がアメリカと日本では異なっている可能性もある。

## (2) 保育者集団の関係性についての自己評価

次に、保育者同士の関係性についての項目についてみてみることにしたい。

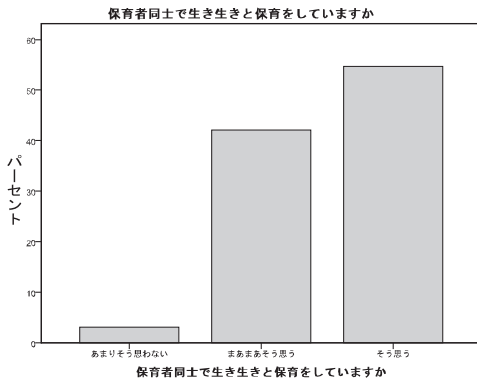


図11

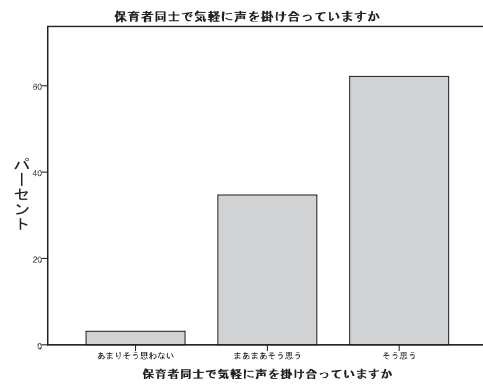


図12

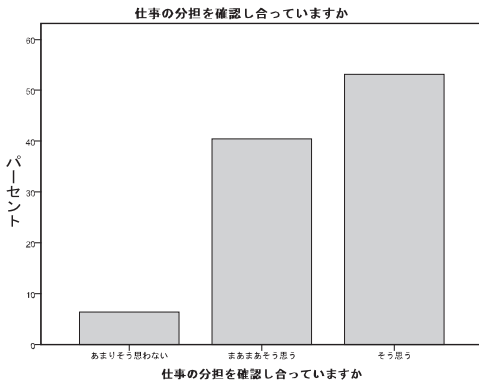


図13

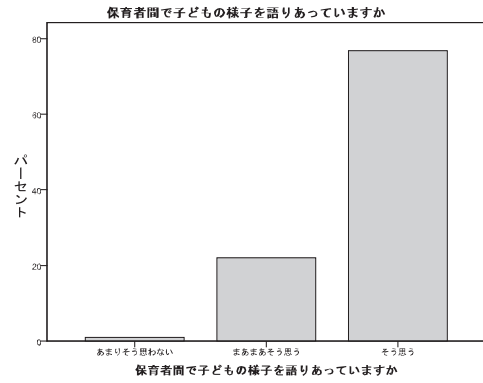


図14

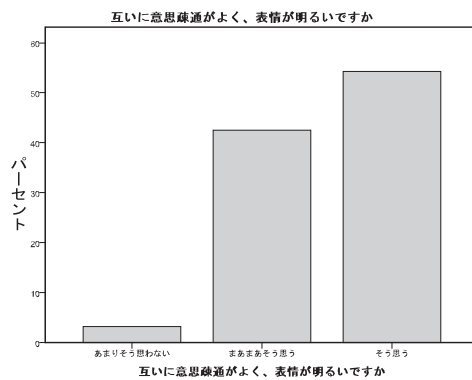


図15

ここでも「そう思う」「まあまあそう思う」が9割を占めていることから、おおむね良好な傾向が見いだせる。しかし、(1)でみた傾向と比べると「そう思う」の割合が半減するということもできる。このことから、子ども一人一人とのかかわりに比べると、保育者間の関係性については、難しいケースを抱えている保育者もいることが予想される。しかし、図

14の「子どもの様子を語りあっていますか」については「そう思う」が高い割合を占めており、子どもについて真摯に向き合うという点についての集団形成はできているという保育者の認識がうかがえる。

### (3) 子どもとのかかわりについて

子どもとのかかわり方についても、おおむね良好な自己評価となっているが。

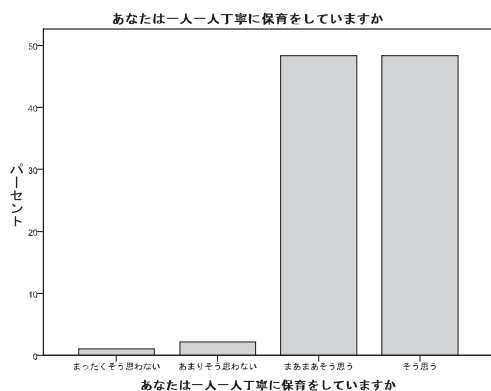


図16

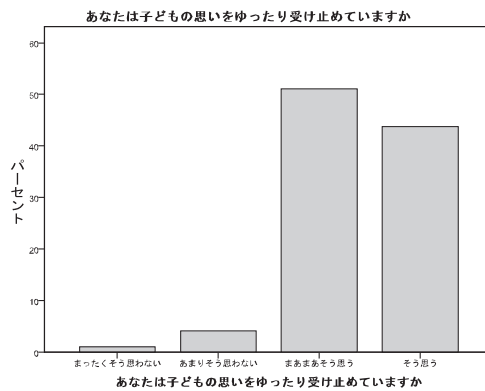


図17

図16、17からは子どもと丁寧に関わっている保育者の様子がうかがえる。

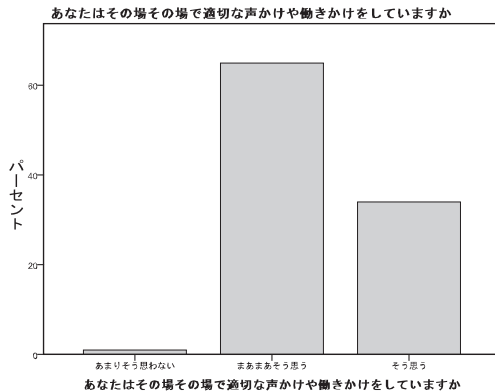


図18

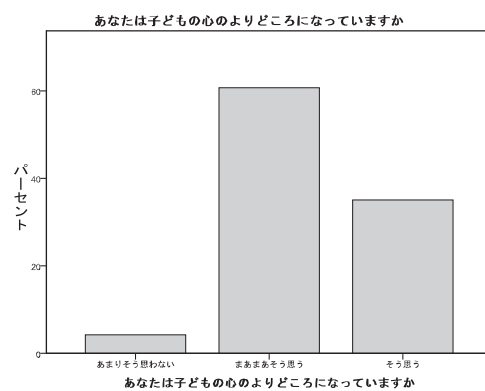


図19

図18、19では「そう思う」「まあまあそう思う」の割合がこれまで同様に高いものの、「まあまあそう思う」の割合が最も多く、1人1人に関わってはいるものの、子どもの発達を促すような「適切な声かけや働きかけ」といった意図的な声かけについては、若干評価が下がっている。また「子どものよりどころになっているか」も「まあまあそう思う」が最も高い割合となっており、自分が子どもにとってどのような意味のある存在なのか、また自分の声かけや働きかけが子どもにどのような影響をもたらしているのか、という点については、曖昧なまま日常の保育が行われている可能性がうかがえる。

(4) 子どもの様子について

子どもの様子については、いくつか別の傾向がみられた。

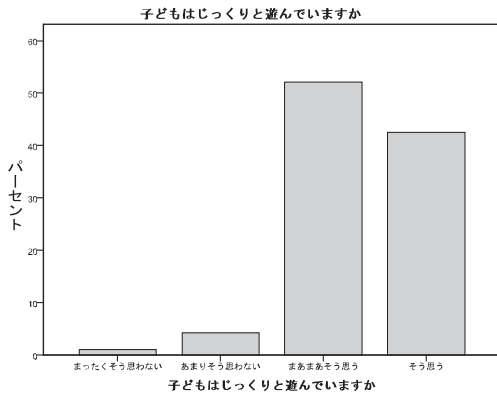


図20

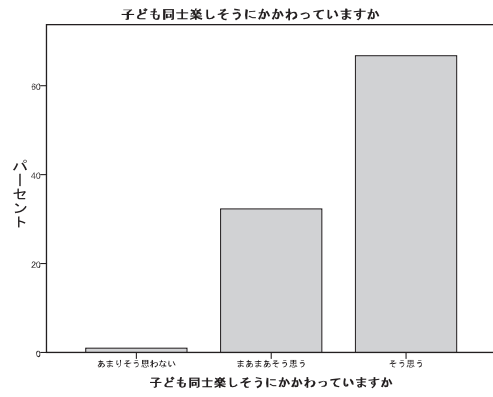


図21

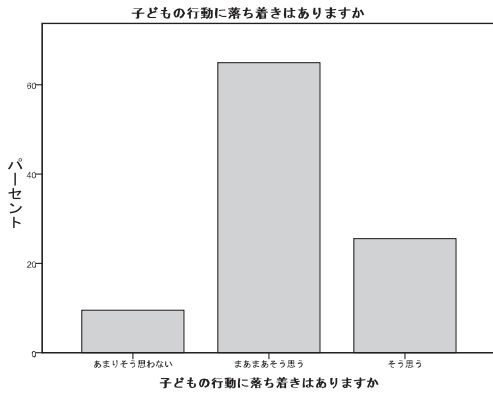


図22

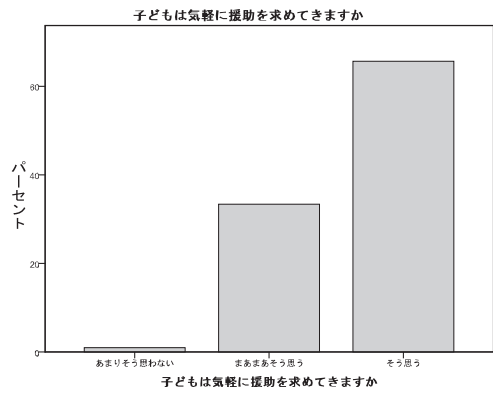


図23

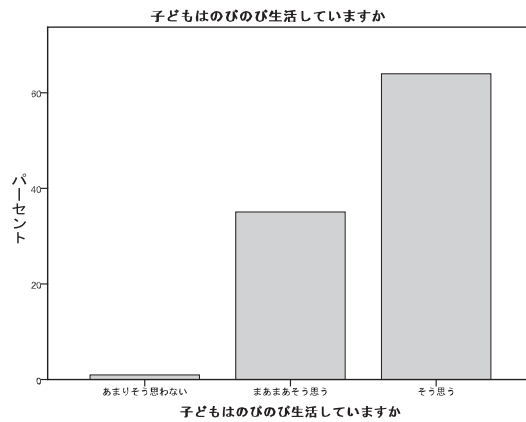


図24

図21、23、24では子どもが仲間同士のびのびと生活し、保育者とも良好な関係が見いだせる。しかしその一方で、図20では「じっくりと遊んでいるか」では「まあまあ思う」が高い割合を示しており、また図22でも同様の傾向がみられる。このことから、全体としてはよい雰囲気子ども同士の生活が成り立ち、子どもと保育者の関係も良好ではあるものの、その一方で、「じっくり遊べない子ども」の姿や「落ち着きがない子ども」の姿を気にしている保育者の姿をうかがうことができる。

「なんとなく大きな問題もなくよい」けれども、1人1人の育ちがじっくり確実に保障されているのか、については迷いを持ちながら保育している可能性があるといえるのではないだろうか。

### (5) 保護者との関係

保護者との関係については、難しくなっている現状を耳にすることが少なくないが、実際には保育者はどのようにかんじているのだろうか。

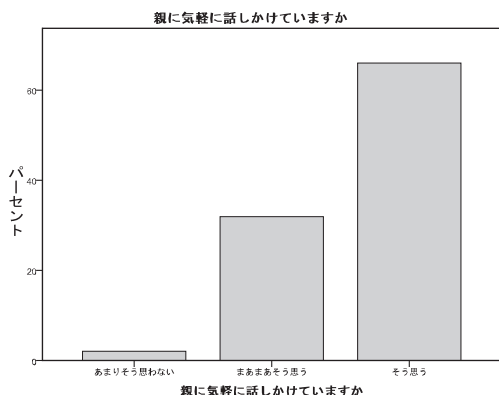


図25

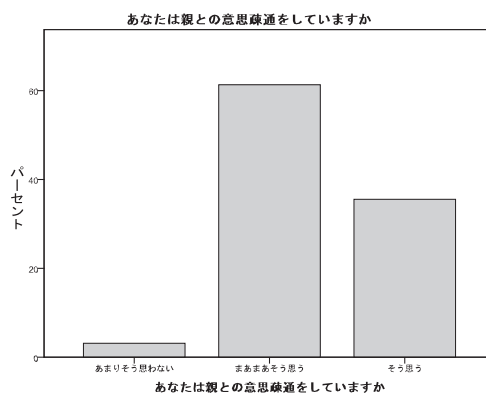


図26

図25からは保育者は親に積極的に話しかけていることが分かる。また他の項目でも「親に求めに丁寧に応じるか」については「そう思う」の割合が高かったことから、同様のことがうかがえる。しかし、図26「あなたは親との意思疎通をしていますか」については「まあまあ思う」が最も高い割合を示しており、コミュニケーションはしているものの、その質については、迷いや疑問をもつ保育者の姿が浮かび上がってくる。

### (6) 環境構成について

環境構成については、養成校では学生にかなり重要なウェイトを占めて指導している内容でもある。現職の保育者はどのように評価しているのだろうか。



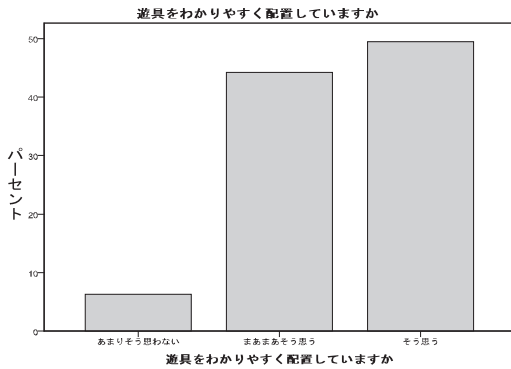


図27

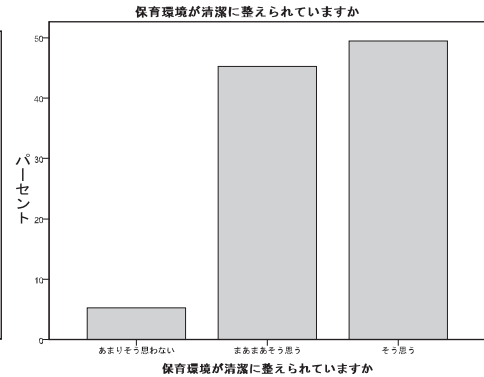


図28

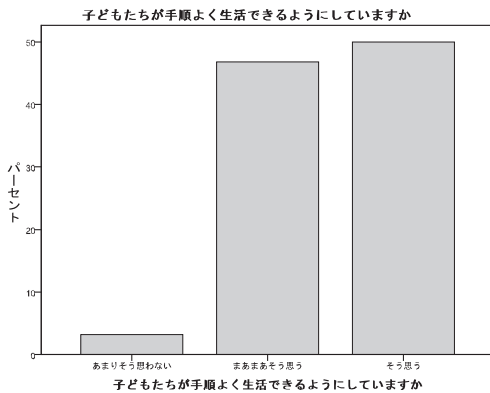


図29

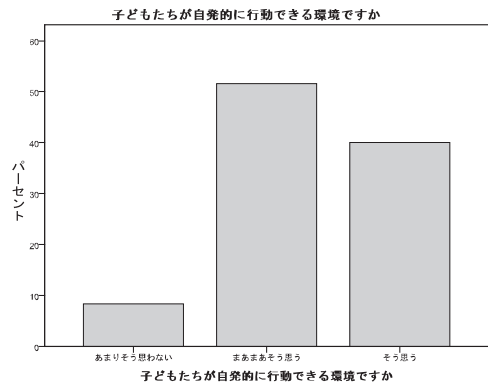


図30

環境構成の項目で、初めて「そう思う」の割合が6割を切ってくる。全体的には「そう思う」「まあまあそう思う」が多くを占めており、高い自己評価ではあるが、他の項目に比べると、環境構成の部分での評価が若干ではあるが低い傾向にあった。

特に図30では「子どもが自発的に行動できる環境か」の問いで「まあまあそう思う」が最も高い割合を占め、「あまりそう思わない」も1割を占めている。

「環境を通した」保育について、若干ではあるが、保育者の自己評価が他の項目と比べると低い傾向がみられた。

### (7) 保育観について

保育観については、図に示すように、おおむね見守る保育、さりげない保育をしていると答える保育者の割合が高く、指示的な保育をしていると答えた保育者の割合は低い結果がでた。

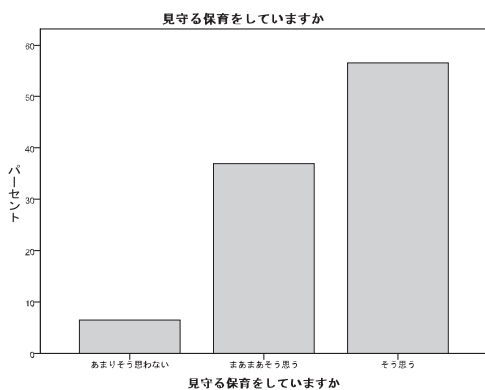


図31

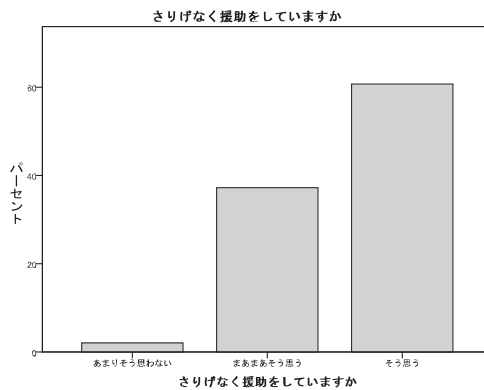


図32

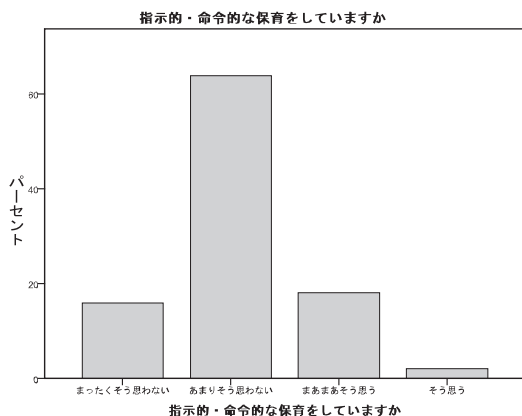


図33

しかしながら、図32からは、指示的命理的な保育をしていると認識している保育者も一定数いることが分かる。

#### 4. 考察

予備的調査の単純集計からいくつか仮説的ではあるが明らかになった点を少し整理してみると以下のとおりである。

第一には、全体的には保育者自信の自己評価は極めて高い傾向にあり、特に子どもに対しても親に対しても丁寧な働きかけ、声かけを行っている点では非常に質の高い保育が行われていることが分かる。

第二には、子どもに対する働きかけについては、文字やことばを教えることや物事の意味を教えることについては若干低い評価がでていた。これは日本の幼児教育の基本が遊びを通じた保育を基本としていることと関係している可能性があり、国際的な比較をしてみると日本の特殊性が浮かび上がる可能性を示唆している。

第三には、保育者同士、子どもとのかかわり、親とのかかわりといった人間関係やコミュ

ニケーションについては丁寧、親切に行っている保育者の姿が浮かび上がった。しかし、子どもに対する働きかけの教育的意味、保護者との意思の疎通という点では、若干ではあるものの他の項目と比較すると低い自己評価だった。また環境構成についても、清潔であることは高いものの、子どもの行動に影響がある環境構成を考えるという点では、意識が弱い傾向も見出すことができた。

以上のことから、全体的には質の高い保育である一方で、子どもにとってどのような意味があるのか、意味づけをしながら保育を展開していくという点では、いくつかの課題が存在している可能性が浮かび上がったといえよう。

さて、日本の幼稚園は園によって特色があり、規模から保育内容まで非常にタイプの異なる園が混在している。その意味では今回の調査では、明確に何かを結論づけることは非常に難しい。しかしながら、個々の保育者は非常に丁寧に親切に子どもや保護者と関わろうとしている姿が明らかになった。またその一方で、関わりの質については迷いや疑問をもっている保育者の姿も確認できたといえよう。

特に家庭や地域の教育力がかつてに比べて低下している現在、幼稚園や保育園に期待される役割は大きく、また子どもにとっては貴重な経験のできる場所になっていることはまぎれもない事実である。

これらを踏まえて、今後は環境構成や適切な働きかけなど、子どもとの関わりや保育を行っていくうえでの質的な問題について課題をしぼり、保育者の意識を探ることや保育現場での事例検討などを行い、検討していくこと課題としたい。

## 参考文献

- 1) 諏訪きぬ・みどり保育園『保育者が変われば保育が変わる』新読書者
- 2) 日本子ども学会編『保育の質と子どもの発達—アメリカ国立小児保健人間発達研究所の長期追跡研究から—』赤ちゃんとママ社